ソルブの民話（四）

パウル・ネド 編
大野 寿子 訳

第二章　魔法メルヒェン

二二　七つ頭の鳥
二三（a）　寝過ごし女と強力（ごうりき）息子
（b）　三人の仲間と灰色の小人
（c）　三つの指輪
二四　一二人兄弟（要旨のみ）

二二　七つ頭の鳥

むかしむかし一人の父親がおり、その父親には三人の息子がいた。三番目の息子がそれはもうだらしなかったので、その子を父親は追い出そうとした。末っ子が遠くへ旅立つことになったとき、何かを持って行きたいと思った。父親にはお金などなく、手もとにあるものといったらウシが三頭だけだった。

さて、この末っ子は旅立ち、もらった三頭のウシを追って森を通ろうとした。森の中で息子は、イヌを一匹連れた肉屋に出会った。息子は肉屋に、自分のウシの一頭と彼のイヌを交換しようともちかけた。イヌにウシを追わせるためだ。二人はそれぞれの動物を交換した。このイヌは「攻めろ」という名で、残った二頭のウシを攻めまくった。

それからこの末っ子はまたもや、イヌを一匹連れた別の肉屋に出会い、自分の二頭目のウシとそのイヌを交換した。このイヌは「引き裂け」という名で、二匹のイヌは残った三頭目のウシを攻めまくった。

それからこの末っ子は、大きな強いイヌを一匹

連れた三番目の男に出会い、自分の持っている最後のウシとそのイヌを交換した。そのイヌは、「粉々に引き裂け」という名だった。

さて、息子は三匹のイヌを連れてある町へとやって来た。その町は青い布で覆われていた。そこで彼は、それが何を意味するのか尋ねた。すると町人は彼にこういった。

「この町では毎年くじ引きがあり、そのくじに当たった者は、町の近くの山に連れて行かれます。それから、しかるべき時間になると七つ頭の鳥がやって来て、山頂からその人間を連れ去ってしまうのです。もし人間を得られないと、この鳥は町へとやって来て、多くの人間を殺すんです。」

まさにこの日がくじ引きの日で、その国の王女がくじに当たっていた。すると国王は娘を救いたいと望み、王女を救える者に、国中の財産を与える約束をした。そこで、追い出されたこの末っ子が、三匹のイヌと共に名乗りをあげたのである。

三〇分程して時間となり、王女はガラスの馬車に乗せられ、山の上へと連れて行かれた。追い出され息子も、三匹のイヌと共に彼女のついて行った。しかし、くじに当たった人間を鳥が連れに来るあの場所に連れて行かれたのは、王女ではなく追い出され息子だった。

さて、息子がそこに立っていると、鳥が舞い下りてきて、彼をつかんで連れ去ろうとした。突然彼は叫んだ。

「攻めろ！」「引き裂け！」「粉々に引き裂け！」

すると、三匹の犬が襲いかかり、鳥を粉々に引き裂いた。その際に、王女を運んだ付き添いの御者が、鳥の七つ頭の中程三つの頭から、舌を切り取った。

そのおかげで町中が、そしてこの土地一帯が鳥から解放された。そして国王は自分の王冠と王女を、王女を救ったこの息子に与えた。しかし彼は、あともう一年旅をしたいと懇願し、三匹のイヌを連れて旅立った。王女の話では、自分のハンカチと指輪を、追い出され息子に持たせたということだ。

さて、追い出され息子が留守の間、あの御者が

国王に、王女を助けたのは実は自分だと名乗りでて、鳥の三枚の舌を見せた。そして御者が王女と結婚することとなったのである。

それから一年後、まさに御者と王女の結婚式の日に、あの追い出され息子が三匹のイヌを連れて戻って来た。彼は事の次第を聞いて、自分の一番大きなイヌの首に王女からもらったあのハンカチを巻きつけ、それに指輪を通し、王女とその花婿である御者が座っている婚礼の席へと行かせた。イヌは部屋へと入り、新郎新婦のテーブルへとやって来て、ハンカチと指輪を見せた。すると、「この人は花婿ではない」という大きな叫び声がした。こうして御者は捕えられ、御者の替わりにイヌを連れた男が呼んで来られた。こうして追い出され息子は王女と結婚し、国王となった。

さて、彼が国王になると、自分の両親と兄たちも故郷から連れて来たいと思い、ガラスの馬車に乗って両親のもとへと向かった。一方両親たちはというと、追い出され息子を偲びちょうど宴を催していたので、彼の到着を大変喜んだ。かくして追い出され息子は、両親と兄たちを馬車に乗せて自分の治める国へと連れて行き、みんな金持ちとなりいっしょに暮らした。

（『伝説、習俗、慣習にみるヴェント人の民族性』、三一頁より。）

二三（a）　寝過ごし女と強力（ごうりき）息子

むかしむかし一人の男とその妻がおり、その妻はひどい寝過ごし屋さんだった。彼女は雌ウシたちを牧草地へと連れて行き、そこで眠り込んだ。目を覚ますと、ウシがみんないなくなっており、見つかりはしなかった。彼女は家に戻った。夫はひどく叱りはしたが、妻にまた別の雌ウシを与えた。

妻はまた、雌ウシたちを牧草地へと連れて行き、そこで眠り込んだ。目を覚ますと、ウシがみんないなくなっており、見つかりはしなかった。彼女は家に戻った。夫はまたひどく叱りはしたが、やはりまた、妻に別の雌ウシを与えてこういった。

「おまえがまた眠り込んだら、とんでもないことになるからな。」

妻はまた、雌ウシたちを牧草地へと連れて行き、そこで眠り込んだ。目を覚ますと、ウシがみんないなくなっており、見つかりはしなかった。彼女はひどく泣き、家に帰ることを怖がった。そこで妻は森に入って行った。

森の中で妻は一頭のクマと出会った。彼女はクマにひどく脅え逃げようとした。しかしクマは人間の男性の姿になった。そして彼は彼女に、いっしょに来ていっしょに料理しなければならないといった。そして二人はある岩穴の中へと入って行った。彼女はそこに留まり、彼に料理をし、男の子を一人産んだ。

ところが、クマは出かけるときにはいつも、大きな石を穴の前へと転がして入口をふさいだ。妻は外へ出たくてたまらなかった。そして彼女は息子に、お母さんの故郷には、お前のお父さんよりももっときれいなお父さんがいるんだよと話した。そしてその少年も、外へ出たくてしかたなくなった。

そこで、息子が一歳になったとき、例の石を上へと持ち上げ始めた。それからというものその石を、毎年ほんの少しずつ多く持ち上げ続けた。そして、少年が七歳になったとき、彼は石を完全に持ち上げてしまった。二人は多くのお金を手に取った。母親は息子に、お前の故郷のお父さんのところにいっしょに行きたいといった。息子は母親について行った。二人が故郷の家へとたどり着いたとき、故郷の夫は、自分に力持ちの息子ができていることと、お金もいっぱいあることを大変喜んだ。

ある日の早朝父親は、森へ入って木を切ろうといった。父親は、のこぎり、おの、つるはし等あらゆる道具を持って行った。少年が父親にこう尋ねた。

「何のために使うの？」

父親はこう答えた。

「これで木を切り倒すんだよ」

すると少年は、木々を根もとから引き抜き始め、

それらを投げ集めて大きな山とした。それらを荷馬車に積んで家へと戻ろうとしたが、馬が荷車を引くことができず立ち止まってしまった。そこで父親は家に歩いて戻り、馬をもう二頭連れて来た。しかしこの二頭をしても、木々を積んだ荷車を引くことはできなかった。すると少年が、馬を軽く鞭打って駆り立てた。ところが、それで彼は馬を打ち殺してしまった。そこで少年は、木々を積んだ荷車の轅（ながえ）をつかみ、すごい速さで家に向かって引いていった。その結果、木造家屋を木っ端微塵にしてしまった。

父親は母親にこういった。

「おい、この坊主をもう家においてはおけないぞ。でないと全員が破滅するぞ。」

それを聞いた母親は息子に、遍歴の旅に出てるよう勧めた。息子はこういった。

「わかった！でも父さんは僕に、石臼三つ分の重さの杖を一本作ってくれなきゃいけないよ。」

両親は息子のためにその杖を作った。そして息子は旅立った。

さて、息子がしばらく歩いて行くと、がっしりとした木々を膝で割っている男を見つけた。すると息子は「君が気に入った」といった。そしてその男に、いっしょに遍歴の旅に出る気はないかと尋ねた。男は「わかった！」といった。

二人がしばらく歩いて行くと、木々の梢を束ね、たくさんの木を一気に引き倒している男を見つけた。すると二人は「あいつが気に入った」といった。二人はその男に、いっしょに遍歴の旅に出る気はないかと尋ねた。男は「わかった！」といった。

三人がしばらく歩いて行くと、山が立ちはだかり、山の内部へと続く鉄の扉があった。三人は長いことその扉の周りをいじりまわし、とうとう扉が開いた。そして三人は、山の内部へと入っていった。そこには大きな城と、とても美しく飾られたテーブルがあった、しかし、食べ物はまったくなかった。三人は、他のどこよりもそこが気に入った。

しかし彼らはこういった。

「ひどく腹が減ったとき、大きな城がいったい何の役に立つというのだ？」

そして、毎日誰か一人が家に留まって料理をし、別の二人が仕事に行って稼ごうと取り決めた。

一日目は、あの木の梢を束ねていた男が留守番をした。すると彼のところに小さな小人がやって来た。その小人は不思議な衣装を着ており、自分の望みをいった。小人は男を叩き、男は本当にボロボロになった。それから小人は、お前は自分に二度と見られてはならず、もし見られたらひどい目にあうだろうといった。

二日目は、がっしりした木を膝の上で粉々にしていたあの男が留守番をした。他の二人が仕事に出かけるとき、あの殴られた男がこういった。

「昨日はひどい目にあった。でも今度はあいつの番だ！」

すると、留守番をしている男のところに、あの小さな小人がやって来てこういった。

「ハゲタカは、まだお前を客として迎えているかい？」

そして小人は男を棒で叩き、男は這うこともできないほどボロボロになった。それから小人は、お前は自分に二度と見られてはならず、もし見られたらもっとひどい目にあうだろうといった。

三日目には、三つの石臼ほど重い杖を持ったあの息子が留守番をした。そして他の二人が仕事に出かけるとき、殴られた男と棒で叩かれた男がこういった。

「俺たちは本当にひどい目にあった。でも今度はようやくあいつの番だ。」

すると、留守番している息子のところに、あの年老いた小人がやって来てこういった。

「悪魔は、今もお前を客として迎えているか？」

そして小人は彼を叩こうとした。しかし彼は、三つの石臼ほど思い杖をとった。年老いた小人は恐れおののき、息子にピカピカの剣を一本渡した。そして、城の下方にまだ三つの城があり、そこに七つの頭を持った竜が、三人の乙女を閉じ込めているといった。そして、その真ん中の複数の頭をまず切り落とせという。そうすれば、竜が力を失

うのだそうだ。山の中には二つの道が続いていた。一本は山頂から向こうの下の方へ、もう一本は山の脇へと続いているのだ。

さて、他の二人が家に戻って来た。息子は釣瓶（つるべ）を長い鎖にくくりつけ、二人の男は彼を乗せた釣瓶を下へと下ろした。こうして息子は、一番目の城へとたどり着いた。そこには美しい乙女が一人いて、ひどく泣きながら毎日を過ごしていた。乙女は息子に、引き換えすよう合図した。さもなくば、竜が彼を殺してしまうからだ。しかし彼は臆することはなく、彼女を釣瓶の中に座らせた。そしてあの二人が釣瓶を引き上げたのだ。

それから二人の男は、息子を乗せた釣瓶を再び下へと下ろした。こうして息子は、二つ目の城へとたどり着いた。そこにはさらに美しい乙女が一人いて、ひどく泣きながら毎日を過ごしていた。乙女は息子に、引き返すよう合図した。さもなくば、竜が彼を殺してしまうからだ。しかし彼は臆することはなく、彼女を釣瓶の中に座らせた。そしてあの二人が釣瓶を引き上げたのだ。

それから二人の男は、息子を乗せた釣瓶を再び下へと下ろした。二人はこういった。

「俺たちもう、女を一人ずつゲットしちゃってるじゃないか。女があと一人いるかどうかなんてわかんねぇ。あいつが今戻ってきたら、女を二人とも、俺たちから取り上げちまうだろうよ。だからさぁ、今度あいつを引っ張り上げたら、釣瓶をひっくり返しちゃおうぜ。」

それから二人の男は、釣瓶をすこし上へと引き上げると、それをひっくり返し、そそくさと立ち去った。ところが釣瓶に入っていたのは、息子が下で乗せていた石ばかりだった。

さて息子はというと、三つ目の城へとたどり着いていた。そこには最も美しい乙女が一人いた。乙女はちょうど竜のしらみを取っており、それをしながら痛ましいほど泣いていた。乙女は息子に、引き返すよう合図した。さもなくば、竜が彼を殺してしまうからだ。しかし彼は臆することはなく、火を吐きかけてくる竜の真ん中の頭を、まず一つ切り落とした。すると、竜の力は失われてしまっ

た。それから息子は、他の六つの頭をつぎつぎに切り落とした。そして乙女の手をとり、山の脇へと続く道をいっしょに歩き、山から脱出したのだ。

二人はしばらく歩くと、一本の美しい木の下へとたどり着いた。この木の下に二人は座り、眠り込んだ。もし二人がまだ目覚めていなければ、今でもこの木の下に静かに眠り続けているだろう。

（『高地ラウジッツと低地ラウジッツのソルブ民謡』第二巻、一六九頁、第九番より。）

二三（b）　三人の仲間と灰色の小人[注1]

むかしむかし、二人の兄弟がいた。ハンスとヤンクという名だった。ハンスは馬鹿でヤンクは賢かった。両親は賢い息子の方を、馬鹿な息子よりもかわいがった。だから二人の間には大きな亀裂が生じ、互いが互いに我慢できなくなった。そこで二人は両親のもとを離れ、運を天にまかせて広い世界へと別々に旅立った。

お馬鹿なヤンクは、ある広い森の近くへとやって来た。そこでヤンクは、一人の放浪者を見つけた。木に寄りかかり、深く思い悩んでいるように見えたのだ。ヤンクは彼に、なぜそんなに悲しそうにしているのか尋ねた。放浪者はこう答えた。

「それはね、私の大きな不運のせいです。」

ヤンクは彼にこういった。

「僕もご同様の身の上です。僕たちは協力できそうですね。いっしょに行きませんか。」

そうして二人は、いっしょに大きな森の中へと入って行き、ほどなくして一軒の宿屋へとたどり着いた。その宿屋で二人は、一人の兵士に出会った。やっぱり同じように、思い悩んでいるように見えたのだ。なぜそんなに悲しそうなのかという二人の問いかけに、兵士もまた、自分の大きな不運のせいだと答えた。そのため彼は、兵士仲間から逃げ出したのだという。二人は兵士に、自分たちもご同様の身の上なので、いっしょに旅をしないかと誘った。兵士は喜んで同意した。

さて三人は、長いことといっしょに歩きまわったすえに、全部が金と銀でキラキラ光っている美しい城へとたどり着いた。ところが、その城には人の気配がしなかった。三人が城中捜しても、人っ子一人、動物一匹さえも見つからなかった。ヤンクと放浪者は、城の中に留まることを怖がった。しかし兵士だけは、その中で一泊したがった。というのも、もう夕方になっていたからだ。兵士は、自分の意見に従うよう二人を説得した。

さて彼らは、城の内部が、外見同様きらびやかに見えることに気がついた。壁には美しい緑の絨毯が掛けられており、天井にはカラフルな彩色が施されていた。テーブルは赤いクロスで覆われており、窓には長くて白いカーテンが掛けられていた。床は黒いビロードで覆われており、白い羽布団の掛かったベッドも彼らは見つけた。三人はとても疲れていたので、そのベッドにもぐり込み、一晩中ぐっすりと眠った。

翌朝、三人が目を覚ましたとき、城の中に誰か一人でも見つかってほしいと願った。だが、やはり誰もいなかった。そこで三人は、この城を、主のいないものとして、自分たちの城にすることを決めた。とはいえ、食べ物がどこにも見つからなかった。そこで三人は、放浪者と兵士が狩りに行き、ヤンクが留守番をしようと決めた。夕方近くになると、放浪者と兵士は、たっぷりの獲物を手にして戻って来た。まもなく彼らは横になり、一晩誰にも邪魔されずぐっすりと眠った。

さて、またヤンクはまた留守番をし、猟獣の肉を調理することになった。他の二人はまた狩りに出かけた。ヤンクが焼き肉をオーブンの上にかけておいたとき、小さな灰色の小人がヤンクの前に現れ、火に近づき体を暖めながらこういった。

「あぁ、無茶苦茶寒いなぁ！」

ヤンクは、一言も声が出ないほど驚いた。小人は、いっとき暖をとると姿を消した。夕刻近くになって二人が戻ると、ヤンクが体験したことを聞かされた。二人はヤンクをせせら笑い、臆病ウサギと名付けた。最も大口たたいたのは放浪者だった。なので次の日は、放浪者が留守番をし、ヤンクと兵士が狩りに出かけている間、食事の支度をしようと決めた。

するとこんなことが起こった。放浪者がオーブンのところで肉を焼いていたとき、また灰色の小人が突然現れ、こう嘆いた。

「あぁ、無茶苦茶寒いなぁ！」

放浪者はあまりの驚きと怖さに、汗をびっしょりかき、小人が姿を消すまで身動き一つとれなかった。狩り部隊が戻ってくると、放浪者の身に起こったことを二人は聞かされた。兵士は放浪者を少なからず叱り飛ばし、次の日は自分が留守番をしようといった。

さて、ヤンクと放浪者は狩りに出かけ、兵士は留守番の料理係だった。すると彼にもこんなことが起こった。灰色の小人がまた、火にあたって暖をとろうと突然現れた。しかし兵士は怖がることなく小人を見つめ、こういった。

「この悪魔め、お望みのところで暖まりな！」

小人は不安でいっぱいになり、懇願し始めた。

「あぁ、許して下さい！あなたさまに何もかもお話しますから！」

兵士は小人を怒鳴り、大声でいった。

「ならば、話せ！さもなくば、お前を火にくべてしまうぞ！」

すると灰色の小人は語り始めた。

「この城の下に、最も大きな丸天井の空間があり、三つに区切られています。それぞれの部屋には乙女が一人ずつ住んでいます。この城は実は、その三人の乙女たちのものです。ある悪い霊が、乙女たちをその丸天井の部屋に閉じ込めたのです。一人目の乙女は、三匹の竜に見張られています。二人目の乙女は六匹の、三人目の乙女は一二匹の竜に見張られています。そこに行くには、扉のところに掛かっている大きな剣と梯子を持って行って下さい！その梯子を下りて、丸天井の部屋に行って下さい。でも、竜の首をはねるときに、竜が目を覚まさないよう気をつけて下さい。それぞれの地下室には、竜の他にも巨人が一人ずつ眠っています。一人目の巨人は熟睡しており、二人目は少し浅い、三人目は最も浅い眠りについています。」

こう告げると、灰色の小人は姿を消した。兵士は手に持った焼肉をおくと、剣と梯子を手に取り、

丸天井の地下室へと下りて行った。扉を静かに開け、中へと入った。すると、一人目の乙女が兵士を見つけた。乙女は兵士に、三匹の竜と巨人が目覚めぬように注意するよう合図した。さもなくば、二人とも取り返しがつかないことになってしまうからだ。ところが兵士は、竜三匹と巨人を手早く殺した。しかしその間に、兵士の使った梯子が高みへと引き上げられたことに、彼は気づかなかった。

それから兵士は、二つ目の部屋へと赴いた。すると、そこに捕らえられている二人目の乙女が兵士に、とにかく静かに入ってくるよう、一番目の乙女よりもたくさん合図した。ところが兵士は怯むことなく、六匹の竜のところへとまっすぐに進み、竜の首をはね、乙女を捕らえていた巨人を殺した。

それから兵士は、丸天井の三つ目の部屋に入った。すると、そこに捕らえられている三人目の乙女が、とにかく静かに入ってと懇願するように合図した。ところが兵士は静かに先へと進み、一二匹の竜の首をはねた。だがそのとき、三人目の乙女を見張っていた巨人が目覚めてしまい、乙女が震え始めた。しかし我らが兵士は、勇敢に巨人に立ち向かい、熱い戦いのすえ打ち勝ち、巨人を殺した。ここに、三人の乙女全員が救われたのである。

しかし兵士が、乙女たちと共に丸天井の部屋の扉のところへとやって来たとき、自分が使った梯子がなくなっていることに気がついた。兵士は、この丸天井の地下室からどのようにして出たらいいのかわからなかった。ところが幸運なことに、三番目の部屋にいた乙女が、魔法の指輪を持っていた。彼女はその指輪を、指にはめたまま三回まわした。すると、何でもいうことをきく精霊が出現し、梯子を持って来た。その梯子をつたって、みんな上方へと上って行った。

ところで、仲間のヤンクと放浪者が狩りから戻って、もう長い時間がたっていた。兵士がどこにも見あたらなかったので、彼らは城中を捜しまわっていたのだ。そこに兵士が、三人の乙女を連れ

て現れた。三人の乙女は三人の男たちに、自分たちがさらわれたのだということと、父親がどういう人物かを話して聞かせた。そして、三人の仲間たちに、家へと連れて行ってくれるよう頼んだ。三人姉妹の父親は、金持ちの侯爵だったのだ。

侯爵は、姿を消していた自分の娘たちを再び目にしたとき、いいつくせぬほど喜んだ。侯爵は、娘たちの解放の顛末を知ると、兵士が娘の一人を妻にすることを許した。兵士は、一番美しい乙女を選び、父親から彼の王国の一部を与えられた。その他の二人、ヤンクと放浪者は、その姉妹二人をそれぞれ妻とした。こうして、彼らの不運は幸運へと転じたのであった。

（『ラウジッツ人―娯楽と教訓のための雑誌』、一八七一年、一五六頁、一七二頁。）

二三（c）　三つの指輪

むかしむかし、あるところに一人の国王がおり、その国王の宮殿には美しい庭があった。この庭はもうかなり前から一本のリンゴの木が植えられており、リンゴの実が毎年が三つなっていた。ところが、いまだかつて国王は、そのリンゴを一つも食べたことがなかった。というのもリンゴの実は不思議なことに、毎年いつのまにか消えてしまうからだ。国王は数年来、このリンゴの木のそばに見張りを立たせた。しかしリンゴは、熟してくるといつも消えてしまう。リンゴがどうやって消えていくのか、何が起こっているのか、結局見張りにもわからないままだった。

あるとき、一人の勇敢な兵士が、リンゴの木のそばに見張りに立った。時計が一二時を打ったとき、兵士は、灰色の雲がリンゴの木の上にふわふわと近づいて来るのを見た。とはいえ、その現象は長くは続かず、雲はリンゴの木のそばからすぐに見えなくなった。しかし兵士の鋭い目が、庭の片隅にあるイバラの茂みの下へと、その雲が消えていくのをしっかり捕らえていた。

翌朝、兵士は国王のところへ行き、その奇妙な話を報告した。すると国王は、彼の息子たちや多

くの使用人を連れて、庭へとやって来た。彼らがイバラの茂みのところへやって来ても、雲が消えて行ったかもしれないような穴などどこにも発見されなかった。国王は、イバラの茂みを引き抜くよう命じた。ところが、使用人たちが深く掘れば掘るほど、茨の茂みのそばに大きな穴を開ければ開けるほど、茂みがぐんぐん成長し始めた。そこで彼らはこの茂みの上で、強力な魔法の呪文を唱えた。するとどうだろう。イバラの茂みの根がだんだんと細くなっていった。そうして使用人たちは、穴を掘り進めることができたのだ。

とうとう裂け目が出現した。そこで石を一個持って来させ、その裂け目の中へその石を投げ入れた。その石が底に到達した音を聞くまでに、とても長い時間を要した。そこで国王はこういった。

「お前たちの中で、穴の中へと下りてみたい者はおらぬか？」

はじめは誰も名乗りを上げなかった。とうとう一番上の王子が歩み出てこういった。

「私が魔法を解きましょう。穴の中へと行かせて下さい。」

そこで、長い綱が持って来られた。その綱は王子の体にしっかりと結びつけられ、王子諸共穴の中へと下ろされた。下ろされる前に王子は、自分が縄を引いて合図したら、再び引き上げてほしいといっておいた。

王子が穴の底へとたどり着くと、そこは暗い鉱脈のような通路だった。その通路にそって彼が先へ先へと進むと、ある橋の上へとやって来た。その橋を越えるとすぐに、王子はある大きな広間へとたどり着いた。その広間の真ん中には、火が赤々と燃えていた。その火のそばには、三人の乙女が座っていた。広間の隅には泉[注2]が一つあり、その中には澄んだ水がほのかに光っていた。その水の上には、大きな剣がぶら下がっていた。三人の乙女はこういった。

「私たちは魔法にかけられています。私たちを救って下さるのなら、この泉の水を飲み干してください。泉の水は「命と力の水」なのです。そしてあの剣を手に取り帯剣してください。それが成功

したら、私たちは救われるでしょう。そしてあなたも幸せになるでしょう。」

王子は手で、井戸の水を三回すくい、三回にわけて飲んだ。最後の一滴を飲み干すとすぐに、人生でいまだかつてないほどの活力が、体内にみなぎっているのを感じた。それから王子は帯剣し、刃を抜き、彼に襲い掛かっていた悪い霊を全部広間へと追い立てた。こうして王子は、三人の乙女を救ったのだ。すると、三人の乙女の中の一人がこういった。

「さあ、私たちを地上へと連れて行って下さい。そうすれば、太陽を再び仰ぎ見ることができます。でもその前に、この贈り物を是非受けとって下さい」

一番若い乙女が、太陽が施された指輪を指から抜きとった。そしてそれを、この若い王子に渡した。同じく太陽が施された布も手渡し、この二つを大切に保管するようういい添えた。

一番目の乙女より美しい二番目の乙女は彼に、太陽と月が施された指輪と、同じく太陽と月が施された布を渡した。最後に、一番美しい三人目の乙女は彼に、太陽と月と星が施された指輪と、同じく太陽と月と星が施された布を渡したのである。

それから若者は、一番目の乙女の体を綱で結んだ。あらかじめ約束しておいた合図をすると、地上の者たちが乙女を引き上げた。さらに綱を下ろし、二人目の乙女、三人目の乙女を引き上げた。

弟王子たちは美しい三人の乙女を見たとき、我を忘れてしまった。一人がもう一人に小声でこう語りかけた。

「我らが兄上にはこのまま地下に留まってもらいましょう。私たちは三人の中から最も美しい乙女をそれぞれ選び、いただいてしまいましょう。」

というわけで二人の王子は、綱を二度と引き上げなかった。二人は、乙女たちと先に城へ戻っていた父王に、綱を再び下ろしはしたが、生きている合図が兄上から帰ってこなかったと伝えた。兄上はきっと地下で息絶えてしまったのだろうと。国王と乙女たちはそれを聞き、大変悲しんだ。そして、むこう一年間喪に服すよう国中に命じた。

さて、一番上の王子はというと、地下深くで多くの悪い霊を打ち負かし、大きな宝を獲得していた。最後に、良い精霊が彼のところにやって来てこういった。

「私があなたを地上に連れて行ってあげましょう。あなたの父上は、心痛のあまり死にそうでいらっしゃいます。乙女たちは深い悲しみに沈み、弟たちは不和に陥っています。」

こうして良い精霊が、若い王子を地上へ連れて行ったとき、実はまだ一年も経過してはいなかった。王子は、そんなに遠くへ歩かないうちに、鐘の音を聞いた。道を歩いて来た旅人に、この鐘の音が何を意味するのか尋ねた。「ああ」と旅人は語り始めた。

「国王様の一番上の王子様がお隠れになってから、もうすぐ一年になろうとしているのです。だから、喪期が終わるまで、毎日こうして弔いの鐘が鳴っているのです。」

そこで王子はこういった。

「あなたの服を私にくれませんか。私のをあなたにあげますから。」

旅人は自分の服と王子の服をとりかえた。それから王子は先へと進み、町へとたどり着いた。彼がそこに到着するとすぐに、国王の守衛が路上で次のような公示した。それは、輝く太陽を施した指輪を作れる鍛冶屋は、王の前に名乗り出よというものであった。そこで王子は、鍛冶屋というものはどこに住んでいるのかを尋ねた。人々は彼を年老いた男の家へと導いた。ここで王子は鍛冶屋に、一人の弟子職人が必要ではないかと尋ねた。すると鍛冶屋の男はこういった。

「そうだな。お前が、輝く太陽を上部に施した指輪を作ることができるならな。」

新しい職人はこういった。

「それは造作のないことです。さっそく作り上げてしまいましょう。」

それから、その鍛冶屋は国王のところへ行き、自分が例の指輪を作りましょうと名乗り出た。二三日して王の守衛がやって来て、指輪ができたかどうか尋ねた。鍛冶屋やびっくりして、弟子職人

がいる仕事場へ行き、指輪が仕上がったかどうか尋ねた。すると職人は微笑んでこういった。

「はい、指輪はできています。数分後にお持ちします。」

親方が弟子職人に背中を向けるや否や、職人はポケットから指輪をとり出し、それを鍛冶屋に渡した。守衛も鍛冶屋も、その装飾品を見たとき、喜びのあまり我を忘れた。というのも、そんなに美しい指輪を二人はこれまで見たことがなかったからだ。二人は職人の巧みの技を褒め称えた。

しかし、それからほどなくして、王の守衛がまたもや鍛冶屋のところへやって来て、今度は、太陽と月を配した指輪を作ってほしいといった。鍛冶屋は弟子職人に、この二つ目の芸術品を作る勇気があるかどうか尋ねた。職人はこういった。

「一つ目が成功すれば、二つ目も成功するでしょう。」

九日後に王の守衛は、指輪を受けとりに再びやって来た。鍛冶屋は再び仕事場の職人のところへ行き、指輪が仕上がっているかどうか尋ねた。職人は微笑みながら、ポケットの中に手を伸ばし、親方に指輪を手渡した。またもや鍛冶屋と守衛は、職人の巧みの技をこの上なく褒め称えた。

それから、王の守衛がまたもや鍛冶屋のところへやって来て、今度は、太陽と月と星が配された指輪を注文した。しかし、弟子職人は親方にこういった。

「私はもう働きません。遍歴の旅にでます。」

鍛冶屋は急いで王のもとへ走り、これまでの二つの指輪を仕上げた自分の弟子職人が、もはや働きたくないといいだしたことを王様に告げた。鍛冶屋自身はというと、そのような見事な指輪を作れるほど器用ではなかった。王様はこういった。

「傭兵隊長を使わそう。その職人を投獄せよ。パンと水のみ与えよ。そうすれば考え直し、指輪を作るようになろう。」

そこで傭兵隊長は鍛冶屋と共に、職人を牢獄に入れようと鍛冶屋の家へと赴いた。二人が到着したとき、職人が少し考えてこういった。

「指輪を作りましょう。ただし、国王様の目の前

でなら。」

そこで傭兵隊長は、職人を王の城へと連れて行った。二人は、大きな広間へとやって来た。そこには、国王と二人の王子と三人の乙女がいた。傭兵隊長と職人が広間に入るや否や、職人はポケットに手を伸ばし、そこから布切れ三枚をとり出した。職人はそれらを広げた。するとそこには、太陽と月と星が輝いていた。そして職人はポケットから指輪をとり出し、その指輪を見せた。すると、乙女の中の最も美しい娘が、太陽と月と星が配されたその指輪を見ると、すぐさま椅子から飛び上がり、職人のもとへと駆け寄りこういった。

「あなたが私たちの救済者です。あなたこそ、私が夫に選んだあの方です。」

それを年老いた国王が聞いたとき、その喜びはひとしおだった、というのも、死んだはずの長男が、自分の目の前に立っていたからだ。

後日、長男王子は、最も美しい乙女と結婚式を挙げた。年老いた国王は、長男王子に大きな王国を与えた。ほどなくして、他の二人の乙女も、長男王子と和解した二人の弟王子と結婚式を挙げた。年老いた国王は、二人の王子それぞれに、北方の領土を与えた。

（「ヴェント人のオリジナル・メルヒェン」、『シュプレーの森とそこに住む人たち』所収、六五頁。）

二四　一二人兄弟（要旨のみ）

むかしむかし一人の父親がおり、その父親には一二人の息子がいた。兄弟たちは父親に、妻となる女性をそれぞれ一人ずつ探すため、世界へと旅に出してくれるよう頼んだ。父親は承諾した。ただし父親は、自分が一二人の息子を持っているように、一二人の娘を持っている父親のところへ行き、その一二人の娘たちと結婚するよう求め、こういった。

「もしおまえたちがそうすると誓うなら、そしてそれぞれの妻たちと私のところへと戻って来るを誓うなら、好きにしなさい。」

それから息子たちは長いこと放浪した。いたる

ところで彼らは、一二人の娘を持つ父親がいないか尋ねた。彼らがあるところで宿泊していたとき、そこから五〇マイルほど離れたところに、一二人の娘を持ち、奇妙なことに自分の娘たちを、一二人の兄弟のところに嫁がせると決めた父親が住んでいることを、ようやく耳にした。しかし、そこにたどり着く前に彼らは、悪い霊の支配する身の毛もよだつほど恐ろしい谷を通らなければならなかった。その霊は、親切にしなかった人びとをすべて石柱に変えてしまうという。そうして変身した人間には、救済の望みがないということだ。

一二人の兄弟たちは、それでも出かけた。大きな森を通らねばならなかった。森では、飢え苦しむ動物たちが、あらゆる方向から彼らのもとにやってきた。兄弟は、持っていた食べ物すべてを与えた。そんな兄弟に動物たちは感謝した。動物たちは兄弟に、動物の毛を与えてこういった。

「もしあなたたちが窮地に陥ったら、これらの毛を燃やすといいでしょう。その匂いを、あらゆる動物という動物がただちに嗅ぎつけ、あなたたちを助けに行くでしょう。」

それから一二人兄弟はある池にやって来て、魚を盗もうとしている泥棒を追い払った。そんな兄弟に恩を感じた小魚たちは、小石を与えてこういった。

「もしあなたたちが窮地に陥ったら、これらの石を水に投げるといいでしょう。そうすれば、助けられますよ。」

三日後に一二兄弟は、悪い霊が住まう谷へとやって来た。昼間だというのに、そこは暗闇が支配していた。幾千もの石柱があちこちに立っており、悪い霊の召使女によって毎日洗い清められていた。そして、その召使女が、ちょうどその仕事をしていた。兄弟は召使女に、谷を通らせてくれるよう、悪い霊にとりなしてくれないかと頼んだ。召使女は、霊を怒らせたくはなかったので、それを断った。しかし兄弟たちは彼女から、どこに巨人（悪い霊）が住んでいるか聞き知った。

「それは、大きな山の中の大きな池の中です。その池の中にカモが一羽泳いでいます。そのカモは

卵を一個抱えており、その卵の中に小さな明かりが入っています。その明かりを消せば、悪い霊に打ち勝ち、彼が魔法をかけた者すべてを救えるのです。」

一二人兄弟は、あの動物の毛を燃やした。するとすぐに、数えきれないほど多くの動物たちがやって来て、その大きな山を平らにならした。すると、池がむき出しのまま横たわっていた。それから一二人兄弟は、その水の中にあの小石を投げ入れた。するとすぐに、四方八方から魚たちがやって来て、カモを岸の上へと追い立てた。それで兄弟たちは、カモを捕まえ、卵をとり出し、明かりを消すことができた。すると、恐ろしい雷と地震が起こった。しかし、それはほんの一瞬だった。それから霧が晴れてゆき、石は人間の姿となり、魔法を解かれた人びとは幸運にも帰途につくことができたのだ。

兄弟は、一二人の娘をもつ父親のもとにようやくやって来て、とても歓迎された。そこで結婚式が一二回執り行われた。兄弟たちは故郷の父親のもとに帰り、それぞれの妻を父親のもとに連れて行った。彼らはとても金持ちになった、というのも、救われたすべての人びとが、彼らに贈り物をしたからだ。

（『ラウジッツ人―娯楽と教訓のための雑誌』、一八六六年、九二頁。）

【パウル・ネドによる注釈】

二二　七つ頭の鳥

ここに報告した竜殺しメルヒェンは、E・フェッケンシュテット『ヴェントの伝説、メルヒェンそして迷信的風習』（以下、フェッケンシュテット前掲書と略記）の二六九頁「親切な犬たち」と密接な類縁関係を持っている。当該メルヒェンでは、主人公が、相続した三頭のヒツジを三匹のイヌと交換する（そのイヌはそれぞれ「餌持って来い」「引き裂け」「鋼と鉄を砕け」という名である）。このテキストはしかしながら細部に至るまで、

L・ベヒシュタイン『ドイツのメルヒェン読本』（以下、ベヒシュタイン前掲書と略記）の二〇二頁「三匹のイヌ」に類似しているため、間違いなくその直接の継承と思われる。我々ソルブのシューレンブルクの版（二二番「七つ頭の鳥」のこと）も、いくつかのモティーフが少々変化してはいるものの、この関連に属している。それに対して、理にかなった全構成に、すでにいくつかの不明点が忍び込んでいる。両方の版は、ボルテ／ポリーフカ『グリム兄弟《子供と家庭のためのメルヒェン集》注釈書』（以下、ボルテ／ポリーフカ『注釈書』と略記）第一巻の五四九頁、グリム兄弟『子どもと家庭のメルヒェン集』第六〇番（以下、KHM60と略記）「二人兄弟」の注釈に書き留められている。

『ラウジッツ―娯楽と教訓のための月刊誌』、一八八二年、九〇頁に、J・B・ショウタが「年老いた兵士」というメルヒェンを一話を報告しており、その大部分がこの話と関連している。導入部は、グリム兄弟『子どもと家庭のためのメルヒェン集』（以下、『グリム童話』あるいはKHMと略記）[注3]第一一〇番「イバラの中のユダヤ人」の最初の部分に似ている。一人の退役兵士がパンとお金を次々に、灰色（あるいは白髪）の小人にただであげてしまい、そのかわりに、猟銃、バイオリン、剣、角笛、財布をもらう。それからイバラにまつわるユダヤ人とのエピソードが続く。その兵士は、一頭のライオンをキツネから助ける。それによりライオンは彼の仲間となる。それから、御者の策略による竜退治と王女救済の詳細な描写が続くのである。

騎士とイヌとのさらなるモティーフが、フェッケンシュテット前掲書、二六六頁「勇敢な騎士」に見受けられる。しかしながらここに登場するイヌは、自分の生まれながらの強さ以外に、並外れた特性を何も持ち合わせていない。このメルヒェン全体が、騎士の冒険という小説めいた描写の性格をあからさまに示しており、オリジナルではほぼないであろう。

シュレージエンの版としては、W・E・ポイケルトが、『シュレージエンの民俗』（以下、ポイケルト前掲書と略記）、四〇頁、第三四番に、我々ソルブのメルヒェン・タイプを配している。ここでは、ヤギ、子ウシ、雌ウシが、三匹のイヌと一本の魔笛と交換される。

我々ソルブのメルヒェン・タイプに属しているチェコのバリエーションに関しては、V・ティレ『チェコのメルヒェン集』（以下、ティレ前掲書「チェコ」と略記）第一巻、三〇五頁を参照のこと。ほとんどのテキストでは、主人公が泥棒との戦いに、あらかじめ打ち勝たねばならない。超自然的な力を持ったイヌのモティーフは、ほとんどのチェコのバリエーションにはそんなに顕著ではない。同様のことが、J・ポリーフカ『スロヴァキアの民話集』（以下、ポリーフカ前掲書と略記）第一巻、一六一頁のスロヴァキアのテキストにもいえる。ポーランドのメルヒェンには、我々ソルブのタイプとの直接的な類例は見られない。J・クジジャノフスキー『体系的に配置されたポーランド民話』（以下、クジジャノフスキー前掲書と略記）、第二巻「魔法メルヒェン」、九頁に記されたいくつかのテキストに、特にA・アールネ／S・トンプソン『民話の話型（タイプ）』第三〇三番（以下、AT303と略記）から一貫して、別のモティーフが混入している。

伝承との比較は、本質的な個々の特性を語らずとも、後述するソルブのテキストの、ドイツのバリエーションへの密接な属性を明白にしている。

二三　三人のさらわれた王女の解放

ここに報告されているメルヒェンは、竜の支配から解放された三人の乙女のメルヒェン・モティーフが問題となっている。『グリム童話』においてこのタイプは、KHM91「地小人」に見られる。ここに属する包括的な注釈において、ボルテ／ポリーフカ『注釈書』第二巻、三〇八頁が、我々ソルブの隣接地域から数多くのバリエーションを提供しており、本テキストの（a）と（b）も書き留めている。F・パンツァーの『ドイツ英雄伝説研

究』第一巻、二四六頁における、クマの息子のモティーフの調査研究も指摘されている。

（a） 寝過ごし女と強力（ごうりき）息子

J・E・シュマーラーはこのメルヒェンを、ローザに住む自分の母親カロリーネ・シュマーラーから得ている。復刻されたのは、L・ハウプトの『ラウジッツの伝説集』（以下、ハウプト前掲書と略記）、第二巻、二一二頁、第三一四番においてである。内容的には同一で、言語的には非常に乏しいテキストを提供しているのが、W・フォン・シューレンブルク『シュプレーの森にみるヴェントの民間伝説と風習』（以下、シューレンブルク前掲書〔シュプレー〕と略記）、三〇頁「強力（ごうりき）息子」である。オオカミの息子というモティーフは、ポイケルト前掲書、六五頁、第四一番「スマルコフスキー」というシュレージエンのバリエーションにおいて見受けられる。ポンメルンのバリエーションについては、U・ヤーン『ポンメルンとリューゲンの民間伝説』（以下、ヤーン前掲書と略記）第一巻、一三五頁、第二一番「クマの息子」を参照のこと。

チェコの伝承では、このタイプのバリエーションが並外れて豊かであるが、クマの息子のモティーフが欠けている。ティレ前掲書〔チェコ〕、第二巻第一部、三八七頁と、ティレの『ボヘミアのメルヒェン目録』（以下、ティレ前掲書〔ボヘミア〕と略記）、FFC34、六六頁を参照のこと。これに対し、そんなに形態の多様性では劣ってはいないスロヴァキアの伝承において、このタイプのいくつかのテキストが存在する。ポリーフカ前掲書、第一巻、二六二頁参照のこと。これらのテキストにおいて、主人公は自然なやり方で、並外れた強さを獲得し、自分と同様に強い仲間を探す。これに対し、クマのモティーフは、ポーランドの伝承では馴染みのものである。このメルヒェン・タイプの三七の類話を記録している、クジジャノフスキー前掲書、第二巻、一二頁を参照のこと。

（b） 三人の仲間と灰色の小人

このテキストは、一八三二年の手書きの『ソルブ新聞』、二九号、八頁に最初に登場しており、バウツェン近郊のクムシュッツ出身のハンドリイ・クラヴェによって報告されている。このテキストには、不思議な血筋と特別な強さというモティーフが欠けている。そして、不実な同行者というモティーフも欠けているのである。一方このテキストは、ハウプト前掲書、第二巻、二〇二頁、第三〇八番に収録されたドイツのオーバーラウジッツ（高地ラウジッツ）のメルヒェン「勇敢な鍛冶屋について」ととても類似している。最初の活字化は、『ドイツ古代学誌』、一八四二年、三五八頁においてであり、ベヒシュタイン前掲書、二六五頁もである。F・ジーバーは、彼の「オーバーザクセンの民間メルヒェン」研究において、これについて調査している。『中部ドイツの民俗学誌』、一九三五年、一二九頁参照のこと。

このメルヒェン「勇敢な鍛冶屋」では、修道女と鉱夫と鍛冶屋が集まり、ある人里離れた城に行き着く。鍛冶屋は灰色の小人を打ち負かし、大きな宝を発見し、二人の乙女を救い出す。このメルヒェンは、『ラウジッツ―娯楽と教訓のための月刊誌』、一八八五年、四一頁「灰色の小人」で、自由形式なソルブの再話として登場しており、それは、E・ヘラスによって報告されている。

シュレージエンからは、ポイケルトがこのタイプの九つの異なった資料を収集している（ポイケルト前掲書）。第三九番と第四二番～四九番であり、その中でも第四三番には修道女と鉱夫と鍛冶屋が登場する。最も完璧な形なのは、第三九番「三人の仕立屋と一人の退役兵士」である。第四七番～四九番には、王女のモティーフが欠けている。チェコのメルヒェンにおいては、ティレ前掲書〔チェコ〕、第二巻第一部、三八七頁に、特に頻繁に兵士たちが登場する。その兵士たちは退役しており、消えた王女たちを捜し求めるのだ。スロヴァキアのメルヒェンにおいては、三人の兵士が、消えた王女たちを探すために、次々に派遣される。ポリ

ーフカ前掲書、第一巻、一九頁参照のこと。ポーランドのメルヒェンにおいては、このタイプの直接のヴァリエーションは存在しない。

（c）　三つの指輪

ラーベナウによって書きとどめられたこのメルヒェンは、最初に、フェッケンシュテット前掲書、二四四頁に掲載されている。このバリエーションは、ハノーファーの類話に似ている。それは、ボルテ／ポリーフカ『注釈書』第二巻、二九九頁に再話されている。そこでは、主人公が三人の王女の衣装を獲得し、仕立屋に扮して屋敷で奉公し、衣装の提供によって、最終的に自身が実は解放者であることが明らかになる。指輪と金細工のモティーフについては、ハーナウの更なる類話を参照のこと（ボルテ／ポリーフカ『注釈書』、第二巻、三〇〇頁）。我々ソルブのメルヒェンの導入部に存在するリンゴの木のモティーフは、金の鳥のメルヒェンにも存在する（KHM57 参照のこと）。金細工のモティーフは、チェコのメルヒェンにも見受けられる（ティレ前掲書〔チェコ〕、第二巻第一部、四二一頁）。クジジャノフスキー前掲書、第二巻、一二頁が、このタイプのポーランドの類話の存在を証明している。J・シェウチック『メルヒェンと説話―「セルボウカ」記念号』（以下、シェウチック前掲書と略記）、二五頁に、極めて小説的に変容しているテキストが見受けられる（「泥棒の洞穴の三人の王女」）。恐らくここで、H・ドウッチュマンが、チェコのメルヒェンを自由に再話している。一人の王女の解放は、フェッケンシュテット前掲書、六二頁「ハンスとヘビたち」にも見受けられるが、典型的な諸モティーフが欠けている。

二四　一二人兄弟

メルチンによって報告されている。再話した人物については、これまで何も明らかにされてはいない。この手のメルヒェンに関しては、ソルブの伝承にはこの資料しか存在しない。

メルヒェンの中核部分は、卵のなかに隠された明かりであり、その中に、怪物の力が凝縮されている。このモティーフは KHM197「水晶玉」を思い起こさせる。ボルテ／ポリーフカ『注釈書』第二巻、四三九頁が、その包括的な構成において、このモティーフのための諸資料を収集している。

シュレージエンからは、ポイケルト前掲書、八四頁、第五〇番に、「心臓のない男」という、似たモティーフが登場するメルヒェンが載せられている。このソルブのテキストと目立つほど似ているのはしかしながら、J・ハルトリヒ『ジーベンビュルゲン地方におけるザクセン由来のドイツ・メルヒェン』、ベルリン、一八五六年、第三四番に掲載されている、ジーベンビュルゲン地方の「一二人姉妹を妻として探す一二人兄弟について」というメルヒェンである。

このタイプのチェコのメルヒェンに関しては、ティレ前掲書〔ボヘミア〕、FFC34、一一四頁と、ティレ前掲書〔チェコ〕、第二巻第一部、一一九頁を参照されたし。とはいえ、それらのメルヒェンには、我々ソルブのテキストの直接的な類例はない。それは、ポリーフカ前掲書、第二巻、一一頁に収録された、このタイプに属するスロヴァキアのメルヒェンにも当てはまり、クジジャノフスキー前掲書、第二巻、一五頁に記載されたポーランドのメルヒェンにも当てはまる。

【訳注】

注1　「灰色の小人」das graue Männchen の grau という単語は、「灰色」の他にも「白髪」という意味があり、「白髪の小人」と訳すのが一般的であろう。「髪の毛」のみならず、「鬚」や「目」の色を表わしている可能性ももちろん考えられる。しかしながら後述の「ソルブの民話（五）」二六番のメルヒェン「教会の中の幽霊」で「緑の小人」ein grünes Männlein が登場するので、色彩名称上の統一の必要性から「灰色の小人」とし、イメージの広がりを持たせた。

注2　「泉」と訳したドイツ語 Brunnen には、「泉」の他にも「井戸」「噴水」と訳すことが可能で

ある。ここでは、すでに地中であるということと、「その水を飲み干す」という描写に垂直運動を表す描写が付随していなかったことから「泉」と訳した。屋内であるはずの「広間」に「泉」とはいささか奇妙でもあるが、「火」が焚いていることからも、不思議な異界空間の一つと見なされるであろう。

注3　グリム兄弟『子どもと家庭のためのメルヒェン集』（初版刊行一八一二年）の第七版決定版（一八五七年）には、「メルヒェン」が二〇一話（通し番号KHM1からKHM200まで）と、「子どものための聖人伝」が一〇話（KHM201からKHM210まで）収録されている。

【使用テキスト】

パウル・ネド『ソルブ民話―概説と注釈を施した体系的文献一覧』、ドモヴィナ出版社（ボウツェン）、一九五六年。Paul Nedo (Paweł Nedo): Sorbische Volksmärchen. Systematische Quellenangabe mit Einführung und Anmerkungen. Budyšin-Bautzen (Domowina Verlag) 1956.

パウル・ネド『ソルブ民話―概説と注釈を施した体系的文献一覧』に収録されているメルヒェン全八六話中、第二章魔法メルヒェンに属する第二二話から第二四話まで（一〇五－一一五頁）と、同メルヒェンの注釈部（三七二－三七五頁）の翻訳を試みた。

【主要参考文献】

・『ラウジッツ人―娯楽と教訓のための雑誌』、バウツェン（ブディシン）、一八六〇－八一年。Łužičan, časopis za zabawu a powučenje (Der Lausitzer. Zeitschrift für Unterhaltung und Belehrung). Budyšin-Bautzen 1860-81.

・『ラウジッツ―娯楽と教訓のための月刊誌』、バウツェン（ブディシン）、一八八二－一九三七年。Łužiča, časopis za zabawu a powučenje (Die Lausitz. Monatsschrift für Unterhaltung und Belehrung). Budyšin-Bautzen 1882-1937.

・『ソルブ新聞』手書、ライプツィヒ、一八二六－八六年。Serska Nowina (Sorbische Zeitung). Handschriftlich. Leipzig 1826-1886.

・A・アールネ／S・トンプソン『民話の話型（タイプ）』FFC第一八四号、ヘルシンキ、一九六四年。A. Aarne / S. Thompson: The Types of the Folktale. (FFC. 184). Helsinki 1964.

・L・ベヒシュタイン『ドイツのメルヒェン読本』ライプツィヒ、一八四五年。E. Bechstein: Deutsches Märchenbuch. Leipzig 1845.

・J・ボルテ／G・ポリーフカ『グリム兄弟《子供と家庭のためのメルヒェン集》注釈書』、全五巻、ライプツィヒ、一九一三－三二年。J. Bolte/ G. Polívka: Anmerkungen zu den Kinder- und Haus- märchen der Brüder Grimm. 5 Bde. Leipzig 1913-32.

・グリム兄弟『子どもと家庭のためのメルヒェン集』全二巻、第七版、ゲッティンゲン、一八五七年。H・レレケによる再版、シュトゥットガルト、二〇〇一年。Brüder Grimm: Kinder- und Hausmärchen. 2 Bde. (Bd.1. Berlin [1]1812, Bd.2. Berlin [1]1815.) Göttingen [7]1857. nachgedr. u. hrsg. v. Heinz Rölleke. Stuttgart 2001.

・J・ハルトリヒ『ジーベンビュルゲン地方におけるザクセン由来のドイツ・メルヒェン』、ベルリン、一八五六年。J. Haltrich: Deutsche Märchen aus dem Sachsenlande in Siebenbürgen. Berlin 1856.

・K・ハウプト『ラウジッツの伝説本』第一巻、第二巻、ライプツィヒ、一八六二年-一八六三年。K. Haupt: Sagenbuch der Lausitz. Bd.I und II. Leipzig 1862-1863.

ソルブの民話（四）

・L・ハウプト／J・E・シュマーラー『高地ラウジッツと低地ラウジッツのソルブ民謡』ベルリン、一九五三年。転写製版法による一八四一年と一八四三年の二巻本の復刻。L. Haupt und L. E. Schmaler: Volkslieder der Sorben in der Ober- und Niederlausitz. Berlin 1953. Anastatischer Neudruck des zwei- bändigen Werkes a. d. J. 1841 bzw. 1843.

・U・ヤーン『ポンメルンとリューゲンの民間伝説』第一巻、ノルデン、ライプツィヒ、一八九一年。U. Jahn: Volksmärchen aus Pommern und Rügen. 1. Teil. Norden und Leipzig 1891.

・J・クジジャノフスキー『体系的に配置されたポーランド民話』第一巻「動物メルヒェン」、ワルシャワ、一九四七年。第二巻「魔法メルヒェン」、ワルシャワ、一九四七年。J. Krzyżanowski: Polska bajka ludowa w układzie systematycznym (Das polnische Volksmärchen in systematischer Anordnung).1.Bajka zwierzęca (Das Tiermärchen) Warszawa 1947; 2. Baśń magiczna (Das Zaubermärchen) Warszawa 1947.

・W・E・ポイケルト「シュレージェン地方のドイツ・メルヒェン」、『シュレージェンの民俗』第四巻、ブレスラウ、一九三二年。W.-E. Peuckert: Schlesiens detusche Märchen. In: Schlesisches Volkstum. Bd. 4. Breslau 1932.

・J・ポリーフカ『スロヴァキアの民話集』全5巻、マルティン、1923-1931年。J. Polívka: Súpis slovenských rozprávok (Sammlung der slowakischen Volksmärchen). 5 Bde. T. Sv. Martin 1923-1931.

・A・ラベナウ「ヴェンド人のオリジナル・メルヒェン」、E・キューン『シュプレーの森とそこに住む人たち』、コトブス、一八八九年。A.

Rabenau: Originalmärchen der Wenden. In: E. Kühn: Der Spreewald und seine Bewohner. Cottbus 1889.

・W・フォン・シューレンブルク『伝説、習俗、慣習にみるヴェンド人の民族性』、ベルリン、一八八〇年。W. v. Schulenberg: Wendisches Volksthum in Sage, Brauch und Sitte. Berlin 1882.

・J・シェウチック『メルヒェンと説話―「セルボウカ」記念号』第三巻、バウツェン（ブディシン）、一八九九年。J. Šewčik: Bajki a basnički. Jubilejne spisy Serbowki. III. zešiwk (Märchen und Er- zählungen. Jubiläumsschriften der Serbowka. Bd. III.). Budyšin-Bautzen 1899.

・V・ティレ『チェコのメルヒェン集』第一巻、プラハ、一九二九年。第二巻第一部、プラハ、一九三四年。第二巻第二部、プラハ、一九三七年。V. Tille: Soupis českých pohádek (Sammlung der tschechischen Märchen); I. Rozpravy České Akademie Věd a Umění. Tř. III, č. 66. Praha 1929; II/1. Rozpravy České Akademie Věd a Umění. Tř. III, č. 72. Praha 1934; II/2. Rozpravy České Akademie Věd a Umění. Tř. III, č. 74. Praha 1937.

・V・ティレ『ボヘミアのメルヒェン目録』(FFC34)、ヘルシンキ、一九二一年。V. Tille: Verzeichnis der Bömischen Märchen. FFC 34. Helsinki 1921.

・E・フェッケンシュテット『ヴェンドの伝説、メルヒェンそして迷信的風習』、グラーツ、一八八〇年。E. Veckenstedt: Wendische Sagen, Märchen und Abergläubische Gebräuche. Graz 1880.